

週日の説教

金 大烈 神父 2011年11月8日(火)

《ロザリオの鎖 ～しなければならぬことをしただけ～》

今日の福音(ルカ・7-10)を読んで間違える心配のあるところを説明してから、説教に入りたいと思います。

イエス様は、「主人が、畑から帰って来た僕に『先に食事の席に着きなさい』と言うはずはないだろう」とおっしゃいました。このたとえ話は、今の時代ならばしなかったと思います。しかし、当時のユダヤには、『主人』や『僕』のような厳しい身分区別がありました。だから、人々は当然このような考え方を持っていました。当時の常識です。しかし、今の常識とは違っていました。今ならば、先ず「お疲れ様。早く一緒に食事をしましょう。」と言うのが普通でしょう。時代の違いがあることを理解できれば、この福音は理解しやすくなると思います。

今日の福音のポイントは、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです。』と言いなさい。』という、イエス様が最後におっしゃったみ言葉です。

この言葉を読む時にいつも思い出す人物がいます。それは、永井^{ながい たかし}隆という日本人です。彼が書いた「ロザリオの鎖」という本を15、16年前に韓国で読みました。そして、「ああ立派だ」と感じたことが、今でも心に残っています。彼の墓碑には、今日読んだ福音の『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです。』という言葉が刻まれています。

今日は、この永井隆について紹介し、彼が残した心を伝えたいと思います。

彼は、1908年に生まれ、長崎医科大学に入学し、医者としての優れた成績を修めました。そして1931年(昭和6年)に大学のことやいろいろなことで、森山という家に下宿をします。その後、森山家の一人娘の緑と結婚をします。森山家はカトリック信者の家でしたので、1934年、永井隆も洗礼を受けます。霊名はパウロです。その後、ビンセンシオ会に入会し、無料の医療奉仕活動に参加します。1937年、長崎医科大学医学部の講師を務め、1945年6月には、専門であった放射線の研究のせいで被曝してしまいます。そして白血病にかかり、医師から余命3年と診断されます。

その2か月後の8月9日、長崎に原子爆弾が投下され、彼の頭部の動脈が切れてしまいますが、それでも、被曝した人びとを救うために働き続けます。そして、翌朝家に戻ってみると、台所で骨片だけになっている緑の死体を見つけます。それでもその翌朝には、また救済のための活動に入ります。

永井隆43歳の時でした。そして1951年5月1日に彼は他界します。

「ロザリオの鎖」の本には、第二次世界大戦によっていろいろなことを黙想出来たことが、次のように書かれています。

「なぜカトリック信者の村に原子爆弾が投下されて、カトリック信者ばかり8千人の人々が一瞬にして命をうしなってしまったのか。こんなにたくさん人間がいるのに、なぜカトリック信者だけの村

に爆弾が落ちて全部亡くなってしまったのか。妻さえ失ってしまったこの悲惨な事件を、どのように理解すればよいのか、はっきり分かりませんでした。しかしよく考えてみると、これは感謝すべきことだと思いました。なぜならば、この世界の平和、この第二次世界大戦に関わっている全ての民族の罪の償いのために、私たちが汚れない羊として捧げられたからです」

という話です。

この本は、1948年3月、戦争が終わってある程度落ち着いた頃、自分にはもう何も残っていない、そして病院からは余命3年と言われた状況で書かれたものです。

この本を読むと、私たちは何でもないようなことで神様を疑ったり、「なぜこんな試練が与えられるのか」と腹を立てたりしていることを感じます。その結果、世の中は憎む心でいっぱいになり、優しい心、美しい心を失ってしまいます。復讐をすることで、また復讐を呼んでしまうのです。これが今までの人類の歴史です。

しかし、私たちが罪を犯しても、このような素晴らしい良心、信仰を持っている人々が歴史に現れたから、この世は続いているのではないかと私は思います。

そして、このような生き方をする人だからこそ、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです。』という素晴らしい墓碑銘を書くように、遺言を残したのではないかと思います。

私たちも、神様が喜ばれるようなことをよくしています。やる気さえあれば、誰かが喜ぶこと、救われることをすることができます。しかし、その時に一番大事なことは、「これは当たり前のことです。褒められることではありません。しなくてはいけないことをしただけです。」と自然に言えることです。そのようになれば、本当に幸せな人として生きていることになるかと私は確信します。

ありがとうございました。